論考

見えない子どもたちがはじめて出会う絵本

攪上久子
（大学教員）

目の見えない子に、絵本って必要なの？　絵をわからせないといけないの？　見えない子どもたちが楽しい絵本ってどういう絵本なんだろう？

美大生と視覚障害児保育現場のコラボ

女子美術大学では「アートやデザインの表現は社会貢献につながる」という理念を軸に、作品制作と研究の両面からヒーリング・アート（癒しの芸術）を探求する教育を実践している。二〇一七年度ヒーリング・アートプロジェクト演習（三年次）「絵本の向こうに人がいる」対象研究からの絵本制作授業で、「見えない子どもたちがはじめて出会う絵本」作りに挑戦した。（指導教員　横山純子、攪上久子）

幼い時期から見えない子どもたち、視覚イメージをもたない子どもたちにとって、楽しい絵本とはどんなものなのだろう、どんな絵本を保護者や現場の教員たちは希望するのだろう、子どもたちが「さわる」という自分の世界の窓を開け、想像の世界を展開させるような〝さわる絵本〟を、視覚障害幼児教育者、保護者、美大教員らと研究した。話し合いを重ね、四つほどに絵本の方向を絞った。

1　絵を「わからせる」絵本ではなく、絵本を楽しむためのさわる絵がある絵本

攪上久子（かくあげ ひさこ）
女子美術大学非常勤講師。

2 ことばや音をさわる絵本
3 読むことを身体で楽しめる絵本
4 生活（その子の世界）を広げるような絵本

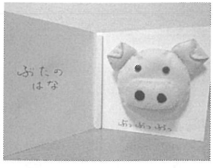
これらを具現化するため、「見えない子どもたちがはじめて出会う絵本」作りのプロジェクトがスタートした。二つの学習の柱を立てた。一つは幼児期の見えない子どもたちのことを知ること、学ぶこと。筑波大学附属視覚特別支援学校幼稚部と育児学級の〇－六歳の子どもたちと遊び交流させていただき、育児学級指導者の高見節子先生と宮城教育大学名誉教授の猪平眞理先生の講義、学生と同年齢の全盲の大学生や保護者からのヒアリングの機会をもった。

もう一つの学習の柱として、日本の見えない子どもたちに提供されている国内外のさわる絵本の、おおよその現状を一望できるよう資料を集め、さまざまなアプローチやねらいをもって作られているさわる絵本を研究した。見えない子どもたちがはじめて出会う絵本があるだろうかという問いをもって見ていくと、幼い子どもたちがはじめて触れてみたくなるような絵本や、見えない子どもたちに思い切り寄り添って面白さを形にしたような絵本はほとんどないことも知った。

今まで作られたことがないような絵本、見えない子どもたちにとってはじめて出会うような絵本を作ろう！　限られた期間での制作のため、試作ではあるが、指導者側の想像を超える革（あたら）しい絵本が学生の手により現れた。これらの作品を、経過を知らないで見ると、これは絵本ではないという人もきっといるだろうが、学生たちは、あくまでも見えない、見えにくい子どもたちが楽しんでくれる「絵本」を探求し、具現化していった。

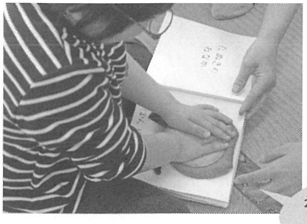
また、絵本と子どもたちの出会いの場では、幼稚部の先生方が一緒に楽しんでくれたことが、大きなサポートになったことを忘れずに記しておきたい。

学生たちが作った、身体でさわって楽しむ絵本（　　内は制作者によるコメント）

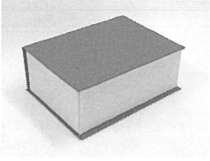


柴野有希 作『ぽんぽんぽん』

身近な動物を、それぞれの特徴をオノマトペで表現し、リズミカルにそれをさわって感じることで、動物を楽しんでもらいたい。



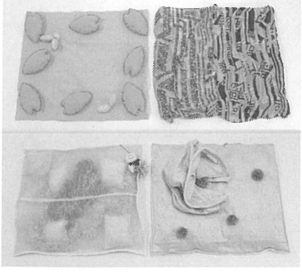
おもいっきり
ぎゅー



橋みふく 作
『ようこそ、はいろう』

絵本の物語の中に入ることをコンセプトに、実際に入れる本を制作した。表紙を開く、中に入る、物語を作る、ワクワク感と子どもたちの積極的な想像の可能性を大切にした。

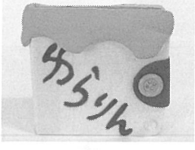
はやく
はいりたーい！

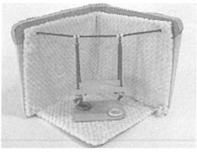


田中美優／宮崎穂乃花 作　『はるなつあきふゆ』

四季のイメージを、お母さんの膝の上で包まれるように、寝転んだり、座ったり、背中やおなかで感じます。

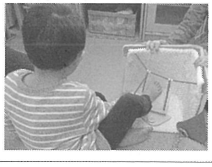
こすったり
にぎったり
たたいたり
もぐったり



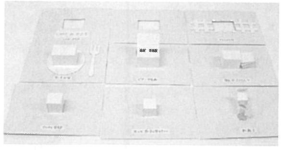


佐藤茉里花 作『ゆらりん』

目の見える子も見えない子も一緒に楽しめる絵本を目指した。見えない子どもたちにとっては、一瞬の場面を表現している絵に触れるのでなく、揺れることで面白いと感じるブランコを、触覚と聴覚を使って楽しめる絵本にした。ブランコを揺らすと下の板と当たることで音が出る。色使いは弱視の子にもわかりやすく、表紙の厚みは強度だけではなく、さわるとワクワクする質感にし、外と中は生地を変え、さわったときに、空間の違いを判断しやすくした。



ぼく
乗ってみました



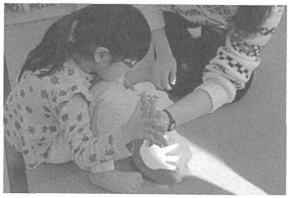
高橋真奈美 作『しかくのかたち』

この絵本はカード式になっている。カードをめくるとまた四角が現れる。何の変哲もない四角が線路の上だと電車に、鍵盤がつくとピアノに……と同じ形でも周りの環境や仕組みで違うものに変化してしまう。色は白で統一し、見える見えないにかかわらず同じように楽しんでほしいと考えた。触れることを誘うようなデザインにした。

おとうふ？

板岡優里 作
『てってって』

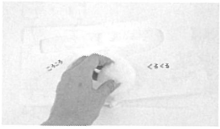
見えなくても見えにくい子でも楽しめ、手と手を触れてコミュニケーションをする絵本。手助けが必要なとき、遠慮なく相手の手をとってほしいという思いを込めた。多くの本は四角い形で製本されているが、絵本の形に特徴をもたせることで、絵本を手でさわって選ぶことから楽しめる絵本にした。



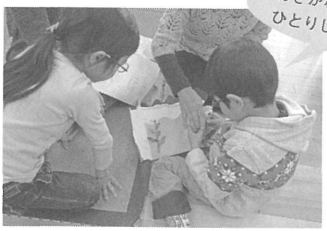
お姉さんの手
おっきーい！

山田彩理 作
『ころころくるくる』

雪玉のように、道筋に沿って、綿を転がしていくとだんだん大きくなっていく。本のページもまたいで転がっていく。変化していく形がさわれるという発想に驚き。



飯野美晴 作
『どーこだ』

黄色い魚といっしょに、水槽を飛び出して海を冒険するお話。本は波の形になっていて、本の向きを間違えずに読める、絵本の角はすべて丸くしてある。ページとページの間に隙間を作り、中に小豆を入れて、めくるごとに波の音がする仕掛けも作った。

おさかなさん
ひとりしかいないの？